鎮魂の譜

松田二郎先生の月命日に寄せて

齋藤 俊治

泣け
泣くならば父のごとく
泣くならば父のためでなく
（田村隆一「声」・原文は散文詩形）

戦後詩、いわゆる「現代詩」に触れはじめたのは十七歳の頃だった。当方の能力では到底理解不能だったのだが、幾つもの巨星や惑星の輝きを受けて、幻惑されながら漂っていたのだと思う。否、幻惑されることに酔っていたと言った方が正確だろう。どしゃぶりの雨の中突っ立つようにして、降って来る詩語や詩魂をただ浴びるだけであったのだろう。

樹海に迷い込んだかのように、何かを見つけては、それを道標として更に迷い道に踏み込み、助けを求めたいのに声を挙げることもかなわず遂には方位を失って一層迷いの樹海に踏み込んでしまう。

そんな十七歳と十八歳の二年間、高校で担任となったのが松田二郎先生だった。不出来なもののならいで、己の自覚のないままに随分とご迷惑をおかけしたことと、古稀を迎えた今でも後悔の念は尽きない。

個々の事情は異なるにせよ、似たような思いを抱く者は多いようであったし、先生にとっても、ご自分の思う処と生徒たちの「すがた」とに大きな齟齬を感じておられたようで、浅からぬ失望感を口にされることもあった。我々以前であれば生徒と教師との間にどこか牧歌的とも言えるような関係性があったにも拘わらず我々の在学時にはそうしたものはなかったようである。

であるならば、卒業後は先生と私達との繋がりは断たれても不思議ではなかったのだが、そこは人の縁の妙と言うべきか、常に誰かが声を挙げて卒業以来毎年クラス会を行って来た。時には複数回行う年もあった。半世紀に亘って繋がって来た所以を辿れば、それは先生の人間性から発せられる「引力」とも呼ぶべきものによるものと言えるだろう。その「引力」は組と先生という関係においてばかりではなく、個々にあっても様々な形ではたらいていた。私の場合も折に触れて手紙のやり取りをしたり、ご自宅に伺うこと数知れずであった。特にここ二十年程は「松田組組報」なるものを出し、印刷業を生業とすることからその製作に携わり、そこへの寄稿文を頂戴する中で、他に比して多くの往来があったと思う。

昨年12月、今となっては「遺稿」となってしまった一文を載せた組報をお届けした際お目にかかったのが最後となってしまった。今、五十年以上確かに存在した繋がりの歳月の重さに、ある種堪え難い感情に打ちひしがれている。

散る花も
世を浮雲となりにけり
むなしき空を映す池水
（藤原良経）

2月27日、訃報に接して以降「虚ろ」と呼ぶしかない状態に陥っている。その日に弔問に伺い、葬儀で合掌焼香に及んでも、区切りをつけることが出来ずにいるうちに、もうすぐ月命日である。そして虚ろである筈なのに、何かの折にふと感情が駆け立ち、名状し難いものが溢れてきたりする。

「鎮魂」とは、黄泉へと旅立った人に捧げるものではなく、残された者の嘆きであり、残された者を慰撫するものならば、この「虚ろ」なるものに言葉を与えていくことで胸を塞ぐ雲のようなものを動かすことも叶うのではないかと、以下戯れ歌に託してみたい。

まみやさし
男の子女の子の教室に
「幸福を売る男」の歌唱

三年生の時であったと思う。何かの折に皆の顔が見えるように四角形に机が並べられた教室で「お楽しみ会」のような時間を過ごしたことがあった。当時流行っていた歌を歌う者もいて、場は普段と異なり寛いで砕けた雰囲気となっていた。その他の処は詳しく憶えてはいないのだが、結びに先生が「幸せを売る男」を歌われたことを鮮明に記憶している。元来は明るい曲調であるのに、先生の歌声はどこか悲しげで切ない響きであった。場は急に一種厳粛な空気となり、言葉を失ったのは私ばかりではなかったろう。今にして思えばあれは、先生の思う処から（この私のように）離れている者への、願いを込めたある種の「怨怒」のようなものの響きではなかったかと後悔とともに思い返すのである。

つぼくらめ
来ぬ春幾重久しくて
失せてはならぬ
ものをば思ふ

城址の傍にある学校に通っていながら、春に桜が爛漫と咲いていても、殆ど何も感じていなかったと思う。月山も至る処で眼にしていた筈だが、今のような思い入れは湧いて来なかった。若さと幼さ故と言えばそれまでだが、根底に「古典の美」を宿しておられた先生からすれば、我らはどのように映っていたのだろう。

田に塩を
撒く狼藉を赦すまじ
とて老いの身の
一分に立つ

在学時の私達にとっては、先生は組担任・国語教諭という側面が大きかったが、それはこちらの認識が及んでいなかっただけで、おそらくは学生時代から弛まず国文学の学識を深めておられたのであろう。鶴岡高専に移られてからは、まさにその道の歩みを孜々として深めておられた。五十歳頃当地の江戸期の歌人・杉山廉女の歌に出会ってからは、その研究をライフワークとされ、還暦の時に『廉女詠草釈稿』、以後『おそ桜の記評釈』『廉女和歌集成』と著してその研究を深めておられた。

先生にとっての「書」とはいかなるものだったのだろう。世の流れに眼を向けた時、感情は穏やかならず騒ぎ立つ。例えばそうした処から気を逸らすものとしての「書」というものもあり得るだろう。けれども先生にとっての「書」とは、束の間の「やすらぎ」のようなものを得るためのものではあるまい、という気がする。門外の者が理解し得ることではあるまいが、己の思う処を象る時、そこには、幾重にも複雑な色あいを持つ、やはり「よろこび」と呼ぶべきものがあったのだろうか。

朗詠の
声おごそかに
流行歌のみ口遊ぶ
我らの耳朶に

在学時のある時「百人一首」の歌を詠み上げて下さったことが。その朗々たる声の響きに圧倒された覚えがある。「現代国語」の時とは異なる「みやびな」風に、体温が高いばかりで野卑な性根がくすぐられたのであったろうか。

憂き世をば
洗ふごとくに月の山
峯より水を
田に通はしむ

高校卒業後数年、首都圏に住んでいた。先生との手紙の往来が始まったのはその頃のことで、当方からすると古典の世界の持つ「深淵」を覗き見し始めた頃でもあった。ある時、確か東京駒場の「日本民藝館」であったと思うが、色付きの和紙を見つけて先生に贈ったことがある。程なくして先生から、そのうちの一枚に李白の「山中問答」を認めたものを頂戴した。それは数十年経った今でも我が家の貧相な玄関を荘厳してくれているが、そこには「耕峯」の名が。先生らしい雅号と感じ入ったし、今も同様である。

古写本の翻刻と評釈に心血を注がれる日々を重ねること、いかばかりであったろうか。しかし、そうした日々にあっても、風雅とも言うべき処に身を委ねるのではなく、世の荒波や騒めきに知性と感性を研ぎ澄ませておられたように思う。最近では某国の非道の行いに心底からの憤りを露わにしておられた。

世の安穏を願うとは、思想信条あるいは学識のみに拠るのではなく、肚の底に何を据えているかということであろうか。先生にとってのそれは、子どもの頃の過酷な戦争体験であったのでは。

然れども
和漢出羽の秀歌句を
墨に流して
たどるよろこび

讃頌の響き
大地に月山に
峯を耕す
人のもとにも

娘が中学生の時、合唱祭に行き、そこで合唱曲「大地讃頌」を初めて聴いた。「母なる…」の出だしに思わず涙腺が刺激されたことを覚えている。子ども達の歌声ということもあったかもしれない。その後この歌に触れるたびに、月山を想起し「わが大地は…」と問うたりしている。恵みゆたかな自然界の母性を謳い上げた歌だが、今はそこに、どうしても「父性」をもあわせて感じてしまい、恩師のすがたが重なってくる。

晩年（と言わねばならぬ無念さよ）、先生は当地の江戸期の私撰集『大泉歌集』の翻刻評釈に、山大の先生と分担して勤しんでおられた。『国歌大観』を座右にして「大変な仕事だ」と語られながらも愉悦を感じておられるような笑顔を浮かべておられたことを思い出すと、またしても胸が塞がるような思いが湧いてしまう。昨年三度の入院を繰り返す中で先生の担った分は脱稿し、いずれ一本として纏めることを楽しみにしておられたのに、嗚呼。

先生は「（在学時はどうあれ）卒業後はともだち」とよく口にしておられた。その言葉に甘えて、寄稿や講義をお願いした。語らいの時も随分と頂戴した。いずれも大切な財産である。それらが過去のものとなることはあるまい。否、その記憶の色あいを保ち続けることが、迷惑のかけどおしだった者の負うべき責であろう、と思うのである。

泣くならば
涙隠らす師のごとく
泣くならば師の
ためでなく……

（鶴岡市若葉町）